

守國公傳歌

本
此
之
語

秋山文庫
1-393
/

心におもふことを知るもの節
くものにつけていひ出せる
中にも君につかへたやをし
たひこのかみをうやま
ひ友をむつひ身をつし
國をたすむるたすけとも

ならむことよみ虫たらん
こそあらまほしけれ爰
に千秋館のあるし風月の
君つねにやまと歌を好ませ
給ひ春の花秋の月の夜
折にふれときはつけつゝ

はかなきはふれ草に口す
し給ふことのすはなる中に
も世の教人の戒ともなりぬ
き事なむおほかりけるそれ
の中は山に世をのかれむより
久かたの雲に身をまかせ雲

とともにふりぬる身にも
消る粟は濁さくらむことを
ねかひあるは峯の雲に
常なきよをさとしこめて
かしはのうらたもてなき人
をしたひあるは明日といふ
心ならびに再ひあはぬ世
を忘れひとの親となりそ
子を思ふ道の浅からぬを
しりあるは我身をかこりみ
て人をとめす口には残る
かさきいひて心によきを恨む

むなとす一て戒をふくめる
歌すくなからす又浅澤水の
浅き心より深き淵澗をこと
せず下行河のかうらぬ年月
に鷺鳥かぬ身をころれ一曉の
鐘に徒に過くることを歎き
ぬすめの床に夜の間のあら
しきいとひ山川の橋にたく
く薄き氷になすうらくてよを
わたるあやうさきめの色
香に迷ふ心もて君につかく
子をいつくしむまこともて

親につかむことをしめし
心をめむる犬ちよをよふ
みのむし新す枕の思ひ
うまにやすむする心存か
たま世をしうて世をいとふ
人其道を知らぬ身にてさ

かしらするものたくひを
ちくみな世の教人の戒とも
なりぬたまこと也後この歌を
見その心をえはらむものは
晴行空に曇りしよをたむひ
夕月の夜ことの影にみつれハ

かくるならひをささるとるし
くさはひと丸なりなきか
されは花鳥の色にも香にも
よもまふのもとの心を忘れ
さらむこそ風月露のほいな
るつけれ

文政うつこのとしのちのむすの
はしの水は庵に身を きの正教

山によをのかるよりはく方の
そらにわかみをすてつらなり
雪と雲に降りつもりたる身がほむ
まゆる雲は溜すすもかな
よしあしむ人のことはななしけ
うとみもはてすたのまれもせず

なにもまたいふことぞ目花も
この世の外の色音ならぬを

世中のつねは常なき峰の雪
よものあらしに清くもつ
なにも事たるのみほふし
ならぬものおほれみせける

うらおもておはらぬ人を友とせよ
このまかしはのともかくにも

大かたはわが身のうらにまきあるあり
みを捨とこそよをおもはめ

くりかしの身をしらほ人もまた
つらきのみまは思ひはてしを

こらちねのいらにや^くましたてし
心のほとも身にはしらすや
あまといふ心のなりひに留しきぬ
ふたひあゝんこのよならぬを
一筋に道をいつくせつぐはやま
このもかのもにこづつて

人の親となりにし後にとこやな
子を思ふ道はあゝまとの
うしとてむ人なとのめそひとまた
うらむことなほ我みなりしを
ちりひちのなり出る山をえとも
よしあしつのも人のりあま

なみふらそみなしふこゆる世あり
ひとの心の束のまづやまけり
おらのまといにはいとさうには
たもはぬ故に世をうり志なり
生したてし親の恵をおもひなは
わかみを君につくさるめや

たるとをしらぬころらの行末は
このよをうしとことちこそせめ
よのくのわかものかほに思ひみほ
ひとり生れて人とありしや
ともに今もれぬ恵はあかまや
お記したてしもおあしなつるも

ことのはまいふまほはあまの
あのみ 謝罪はうまもあし
ことは費すともまことなまはせし
世の神のうとはいはしともすれは
心のはなな山かせそあく
心の出入時なきとやうんも

千世あともまことばえの
日々と共にてらすうらなり
年月はかいらぬものを我ながら
おとからぬみそ驚馬かれぬ

三 猿の猿として

いふまきをいはさるもまたいはさるを
いふも道にはかなはさるなり
目花をみきるはうしや雲かせの
あたるものはよしみさるとも
哀ふめき西三村の雁に虫の聲
ころをよめていかてまかさる
性急なるもの戒をいふ

直なる道たにゆかはまよはしな
馬のはやさもうしの遅さも
契あれはことしのけふの曉の
ねずめのかねの音をすくかま
愈りをいましめてふん
けふの目もくれぬと告る鐘の
音におとめてこのとをしをしかふ

曉のおなまし

曉のねさめにもものをおもふまし

はかに山嵐のなまきよなせは

た^こらぬまなけくをな

よまきこともこゆれはおなしあし

園の中みちところらといめからよ

かけてしもまた沖たゆる山川の

はしや^つまよのわたるなるら

深き^深対うすま^深氷はけおの目の

さげのむ^深うちにありといえれ

ひとかたに心とめよすよちと

いつこのうら^深か波をせはなす

色と香に迷ふ^深心まことともし

君につか^深よ世の中^深のひと

子を思ふにこのかみのまことも
親につかすよ世の中のひと

よしといふもわがよきならんひと
たよふあしのよのなめのひと

犬の繪のさしとて

よしとしりてあすね心のあやしきを
とのむる犬の聲もあれかし

つましましき新報枕の思ひをは
なかくしも世の道にわするな

いまはこころをよめありぬ
うきはこころをよめ事なほあり

かくあはれはかろか外に何かせ
世をもたのます身をもたのます

道にあたりてかく思ひ候はば
うぢまゝに候になれしと思ひ
うぢらぬよきをこゝまよと
せの心をいづくはちの
心にうぢらぬよきをこゝま
いひかたはことなぬす候は
つゝむつらぬも身にはありな
わづめにも心の底のくさりなき
光そやみをとてうぢらぬ
君と親につかか針に後の世を
ねかはん法の道あらぬやも
佛念も人の教もこひしかは
ゆの爲によけれは國の爲ならず
みまをすそとそ國におさめし

ありのたまき世をしらそよをい
心そ山にするつかりけるふ
身をしらハよをも人をもつらみし
くらまにそみをも難まつつ
事たねはたるにもなれ何くれを
たるのうにも猶なけりかな

よそをそしるよそに殺身をくらつ
猶そしらるるつまわかみならまは
いけるしもみえぬ家のみのまも
ちよふ小聲にありとこそまけ

九思をよめる

視
思
明
雲かすみ遠のたかぬはちほおと
まかはぬ花の色をみせまし

聽思聰

心とめて守げにはた織まりす
をのかすまく聲そわめるい

色思暈

はけし寸の出風もたてほのくと
遠山まのの霞むのくとや

貌思恭

雲を凌ぐ姿もあらず枝たれて
みすほかほぬ千世のまつはら

事思敬

とことはに心のこまのつなとりん
ひかすはなたてよさをわたるし

言思忠

おもひとことはの花のしけま枝
このみすくなきためしあるよさを

疑思間

くらからハますほの薄いと
露も心にかけてしとあし

念思難

よしやその追手なりとも波風の
あらくはとまれ沖のふな人の

見得恩義

吹風に花の可ふかくかほるとも
みちなき山にふみな速しき

かりのよよと此よをいは、君と親
めくみる何といひやとくら

いやしむも又尊むも其道を
しり得て後に思ひひきたあよ
佛の道をすかしらする人に

はれりてひとりしあまなる影をみれば
くもるや月のひかりならま
天燈のいふことをよみて

夕月の夜 ことの影 道もしれ
望はかけり 空のたからひを
備謙のこしをよみて

おりによあるかなめにいとたかく
なりそ歌ともいひかたきをなは
ふれにかいしりてたはれくさ
なん名つけぬ 文政五つとししむ月
ワ一日風月好

